

DORIS MAXIMILIANE WÜRGERT







ドリス・M・ヴルガート女史の映像は通常のメディア・カテゴリーでは定義不能である。彼女の絵は写真であると同時に絵画であり、コンピューター上で創造されると同時にキャンバス上で生み出される。ヴルガート女史が、写真という手段を用いて記録する現実の一部(それは大抵、人物であったり、部屋であったりするのだが)はコンピューターに蓄えられ加工が施され、さらに、本質的なフォルムに還元された上で、最終的には写真紙への露光という手段をもって変形され、さらに、多くの場合、古典的なグレーズングというテクニックを使って、その上からペインティングが施される。最終的に可視部として残るのは写真が記録した、現実の極く小さな部分に過ぎない。その可視部は人物と状況の痕跡であり、それは同時に、「事実」という、物体とスペースとの境界線や、現実的なものと外見上現実的ではないものとの境界線をぼかしてしまうものの透過的な様相である。

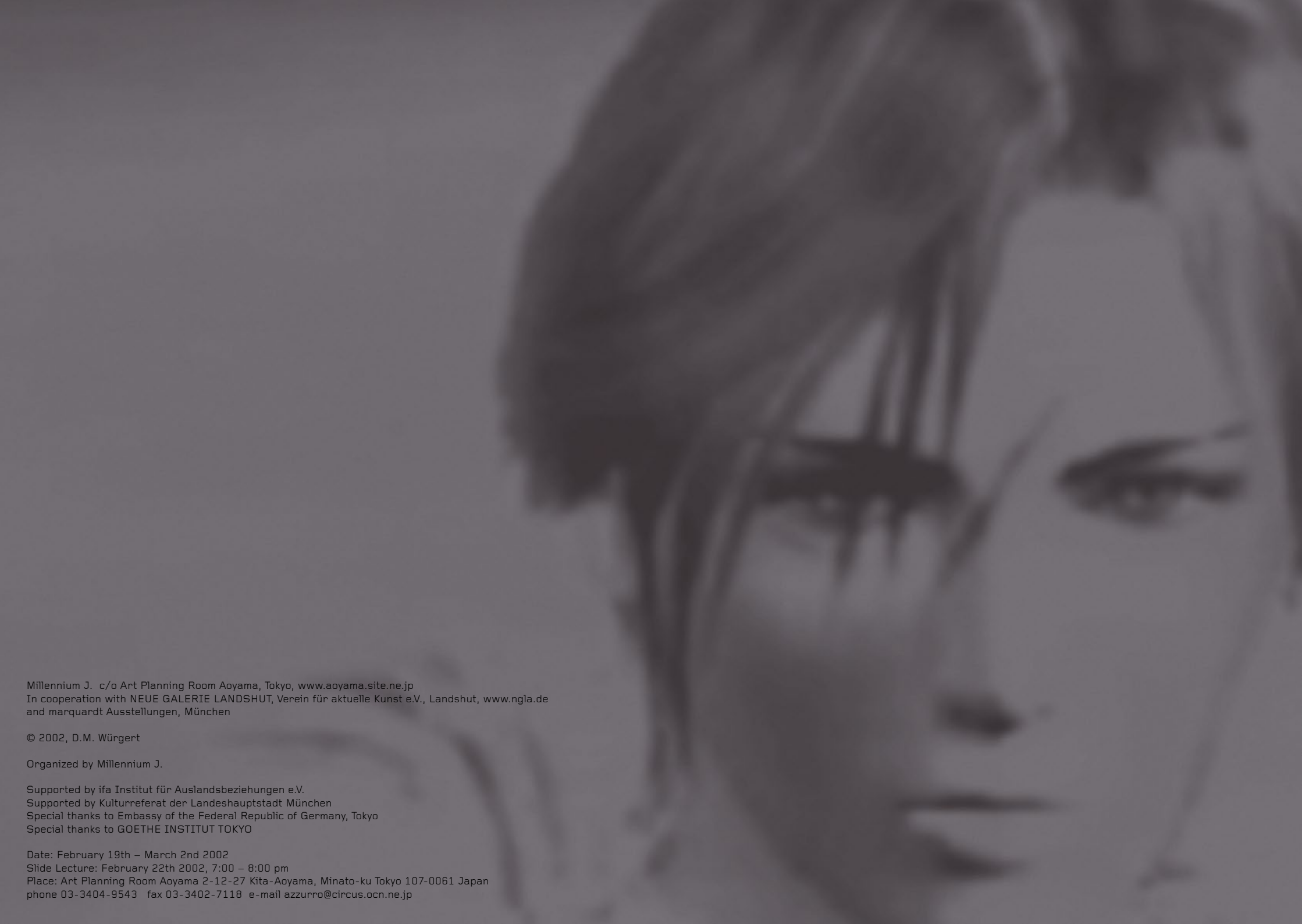
認知心理学においては、諸心的過程(mental process)は「象徴的(symbolic)」であると形容される、というのは、人間は心的過程の中で、物理的には存在せず、かつ、直接的には一度も経験したことの無い出来事や事象に関する情報を操作したり変形させたりすることができるからである。人間の心は想像する能力を持っている。事象なり、関係付けが、不在であっても、速くはしか存在しなくても、また、実現不可能であっても、それらを再現(representation)させることができるのである。このような象徴過程を可能にする能力の源は、「象徴的記憶(symbolic recollection)」にある。人間の記憶の中で収集された情報は、純粋に心的なレベル(mental level)で活性化され操作されるが、この「象徴的記憶」とはまさにそういった情報から構成されている。尚、ここでいう、「純粋にメンタルなレベルで」とは、事象自体の有無や外界からの動機付けにかかわらず、ということである。さて、こうして収集された情報自体は「心的表象(mental representation)」と呼ばれる。心的システムから見れば、外にある諸物体や諸事象が、心的システムの内部で再現(represent)されるからである。

例えば、絵を見るといった人間の知覚能力は、その人が人生の中で獲得し、記憶という無限の貯蔵庫に蓄えてきた「象徴知識(symbolic knowledge)」に依拠している。よって、「知覚する」とは、その人が既に過去のある時点で見た経験のあるもの、その人にとって認識可能なこと、そして、自分の知識に基づいて解釈できることを想起することに他ならない。さて、ドリス・M・ヴルガート女史の画像を鑑賞することは、この想起の原則に密接に関連している。表象化された状況は基本要素に還元され、詳細な状況説明はなくなるので、その結果、ストーリーや興味的な内容は欠如し、多義的な解釈は不可避となる。彼女の作品を観る人は、自分の「印象知識(symbolic knowledge)」に完全に依存せざるを得ず、ヴルガート女史の映像作品間の「空虚な間隙(empty spaces)」は、観る人が自分自身の記憶から引き出した映像で埋めることを強いられるのだ。とはいえ、写真(彼女は写真を作品のベースとして用いている)から詳細な説明を拭き去ることによって、ヴルガート女史は写真を本質へと還元するのみならず、「見え」と認識に関わる物理法則から解放放たれることを可能にしている。陰影の戯れが決して物理法則に沿うものとならないようにするために、光源はレタッチされ、また、ユニフォーム・パースペクティブ(均質な遠近法)を排除するために、物体は除去されたり、逆に付加されたりしている。さらに、比の一定性を無効になるような仕方でもスペースは再構築されている。この結果、拡散状況(diffuse situation)がもたらされるが、その非現実的な性質は、覚醒時の知覚の論理的構成ではなく、むしろ、夢の持つ「事象間に関連性を算う」性質に対応する。

「象徴記憶(symbolic recollection)」は記憶に内在する外界の心的表象(mental representation)を構成要素としているが、ある一つの夢が持つ複数のイメージはその象徴記憶の構成ユニットや構成要素に起源を遡ることができる。とはいえ、これらの心的表象は、外界で知覚された事象(things and events)をアナログ的に、あるいは、写真的に再生したものとして記録されるのではなく、意味ユニット(units of meaning)に抽象化される。夢は画像という形式をもって立ち現れてはくるが、外界で経験された事象の画像記録に基づいてはいない。その結果、夢の内容は外界に対する知覚とは似ても似付かなくなる。多くの場合、夢に現れる画像は新奇さ、非現実性、奇妙さがその特徴である。これは、人間の持つ知覚システムは外界からの情報を抽象化するということを意味している。外界で知覚されたものが変容し、「外的なるものを、アナログ的な内的再生物にしたもの(an analogue interior reproduction of an exterior)」になるのではなく、知覚された出来事(event)の意味が外的な構成(outer structure)から切り離され、暗号化された形式下で記録されるのである。

ロラン・バルトは写真を「現実の目次(index of reality)」と呼んだ。彼にとって、写真紙の感光面への露光は、ピアスの「インデックス」定義に対応する。すなわち、アイコンやシンボルとは対照的に、インデックスは物体に対して物理的な関係を持つのである。ドリス・M・ヴルガート女史の作り出す画像においては、写真の現実に対する自己主張(自分は現実性をもつのだ、という主張)は無効化されている。写真映像加工は、デジタル・プロセッシングという手段により可能になって久しいが、例えばグラフィック・デザインという分野において、それは基本的なツールとさえなっており、ヴルガート女史の作品の基礎もそこにある。とはいえ、写真に変更を加える結果、新たな異なる情報が付加されるのではなく、具象性が拭き去られるのだ。写真の「情報内容」(informative content)は抽象化され、認識可能で普遍的に有効な形式に還元される。写真は、加工される前には具体的な情報を提供するが、加工後の写真は、ひるがえって、空虚なスペースを提示する。この空虚な空間は可視的なものの周辺に広がり、かつ、可視的なものを買越し、それに混透性を与える。こうして演出されるものは、見かけ上は非現実的な虚無(a seemingly unreal nothing)であり、これにより、鑑賞者は自分自身の個人的な知識に完全に依拠する形で、主観的な現実(subjective reality)を経験することが可能になる。とはいえ、我々が「現実」(reality)だと感じているところのもの、「現実」と思っているところのもの、





Millennium J. c/o Art Planning Room Aoyama, Tokyo, www.aoyama.site.ne.jp
In cooperation with NEUE GALERIE LANDSHUT, Verein für aktuelle Kunst e.V., Landshut, www.ngla.de
and marquardt Ausstellungen, München

© 2002, D.M. Würgert

Organized by Millennium J.

Supported by ifa Institut für Auslandsbeziehungen e.V.
Supported by Kulturreferat der Landeshauptstadt München
Special thanks to Embassy of the Federal Republic of Germany, Tokyo
Special thanks to GOETHE INSTITUT TOKYO

Date: February 19th – March 2nd 2002
Slide Lecture: February 22th 2002, 7:00 – 8:00 pm
Place: Art Planning Room Aoyama 2-12-27 Kita-Aoyama, Minato-ku Tokyo 107-0061 Japan
phone 03-3404-9543 fax 03-3402-7118 e-mail azzurro@circus.ocn.ne.jp

